

「大腸疾患の鑑別診断」

東京女子医科大学講師 長 廻 紘 著

筑波大学教授 中 村 恭 一

医学生、レジデント、あるいは消化管疾患を専門としたいという内科・外科・病理医などから、大腸の疾患を勉強するためにはどの本が最適か？と問われた場合には、躊躇することなく本書を推薦する。その理由は3つある。

すなわち、まず第1に、多数の大腸疾患に対して、それらを知るための基礎となる病理そして臨床的事項が必要かつ十分に記載されていて無駄がない。更には本書の題名ともなっているように、その内容は常に他疾患との関連において述べられている。例えば大腸の潰瘍性病変の診断の基本について、潰瘍性大腸炎を鑑別診断の出発点に置く、つまり、それを前提としてそこから思考を進めていくことであると著者が述べているように、著者の明晰な頭脳の中に形成されている潰瘍性病変の診断のための decision tree の部分部分を

随所にみることができる。

第2には、教科書あるいは知識の整理のための本として重要なことは読みやすく理解しやすいということであるが、本書はそれを十分に満足している。病理医にとっては病理はもちろんのこと臨床的なことを、そして臨床医にとっては逆に病理的なことも理解することが容易である。このような内容の本は、大腸疾患の病理と臨床の両方を熟知している1人の著者によってのみ完成しうるものである。本書を読んでいるうちに著者は病理医であるのか、臨床医であるのかがわからなくなってくるほどである。つまり、著者は大腸疾患という分野において、内視鏡学、病理学といったような何々学ということの制限にとらわれず、1つの疾患を種々の視座から眺め理解するという学際的なことの重要性をわれわれに教えてくれる。

第3に、形態を主とする本にとっては、写真の出来具合がその生命であることは言うまでもない。たとえその本の内容・文章が優れていても写真が悪ければ、その本の価値は半減する。本書に掲載されている写真はきれいであると共に目的とするところを要領よく画としてまとめているので、精選された内容と洗練された文章とを一層引き立てている。

最近、大腸疾患の増加傾向のみられる日本において本書が出版されたことの意義は大である。最後に、借越であるが、著者を知る者の1人として希望を1つ言わせてもらえるならば、豊かな経験と知識を有する、そして弾力的な思考をする著者の各種疾患に対する考え、たとえそれが証明されていない考え方・見方であっても、それらを本書に書き加えてあればと思うのは、自称消化管疾患の病理を専門としている者の身勝手な願いであろうか……。本書を読むことによって大腸疾患の知識が改めて自分の中で整理されたことは確かである。

B5判 336頁 図27 写真311
原色図252 1982 ¥29,000 ㊦450

医学書院 刊